序　八王子キャンパスにおける『日本語研究』

小　林　賢　次

都立大学が八王子に移転して、はや二年が過ぎようとしている。目黒キャンパスから移植した銀杏やポプラの木々も新たな土地にしっかりと根を下ろし、葉を茂らしている。

われわれ国語学研究室の活動も、新しい体制となっての再スタートであったが、ようやく軌道に乗ったところと言えるであろう。本誌『日本語研究』は、もともと教員と院生・学生有志で組織する「日本語研究会」の機関紙として継続刊行してきたものである。昭和61年度（1986）に国語学講座が待望の実験講座化され、これを機会に、本誌も名実ともに本学の国語学研究室の“顔”として位置づけられることになった。その間の事情については、第９号の大島一郎教授（当時）の序文をご参照いただきたい。

本号は、特に特集と銘打つことはしなかったが、従来と同様、中本ゼミにおける意味論研究の成果として結実したものが中心となっている。現代共通語の意味分析のほか、外国語との対照研究をめざしたもの、方言を対象としたものなど、現在の研究室の活動の一端を示すものとなっているはずである。どの稿も論文として形を成すまでに、共同の討議を経て、さまざまに思索を重ねてきたものである。しかしながら、まだまだ至らぬ点も多いことであろう。暖かい、また、厳しいご批判・ご指導をお願いしたい。

杉戸清樹氏・荻野綱男氏には、非常勤講師としてお出でいただき、そのご縁で玉稿を賜ることができた。それぞれ社会言語学的な視野の広がりをお示しいただき、示唆を与えていただいた。ご多忙のところ、ご寄稿くださった両先生に感謝申し上げる。

日本語研究の進展はめざましい。われわれ一同、一層の精進を期したいと思う。今後とも皆さまのご支援・ご鞭撻をお願いする次第である。

1992年12月